
バイオハザード4 + ヘタリア + 俺たち

耀夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード4＋ヘタリア＋俺たち

【Nコード】

N4284X

【作者名】

耀夜

【あらすじ】

それはとある日本某所で起こった。

「このゲームのくせに入んねえ」

Wii本体に無理やりディスクを押し込む琥珀。

無理やり押し込んだ結果、とんでもないことが起こった。

バイオハザード4に出てくるキャラがヘタリアキャラ（一部の国）と入れ替わってます。かなり捏造です。オリキャラも出てきます。フェリシアアーノ（イタリア）があんまりヘタレじゃありません。ヘタリアキャラが悪役としとして出ています。人名です。それでもよろしいと言う方は見てください。4人組とヘタリアキャラと一緒に旅へ。

オリキャラ紹介

いしづき
石月
おつか
桜香

15歳 女 2月9日 AB型

ナイフ×2、マグナム（キラー7）

武器：

髪の色：黒 眼の色：黒 髪はくくっていない

服

スカジャン：背中にうさぎが描かれている。色は薄黄緑。
シャツ：ちよと特殊な繊維で出来ている。黒。

ズボン：黒いデニム生地の手ショートパンツ。

ニーハイ：黒と青のボーダー柄。

ブーツ：茶色の踵が高くないブーツ。（何か仕込んである）

職業：学生

好きな食べ物：白ネギ、ピーマン、抹茶、ココア

嫌いな食べ物：特になし

特技：情報収集

家族構成：祖母、母、父、兄

ごく普通の家庭で育った。

トラウマ：ヘビ

高校一年生。かなりの怖がり、なのだが最近兄の影響でバイオハザードに手を出したところあんまり怖くなかったらしい。4は初体験。一応オタク。You Tubeで「ココア」として活躍中。時々黒くなりながら実況プレイする。動物は好き。

いしづき
石月 拓真

18歳

男

8月23日

O型

武器：剣？、

ハンドガン（ブラックテイル）

髪の色：黒

眼の色：茶色

流し短髪

服

スカジャン：背中に龍が描かれている。色は赤。
シャツ：左胸元に白いプーマが描かれている。黒。

ズボン：迷彩柄。緑。

ソックス：くるぶしまでの長さ。白。

スニーカー：緑。

職業：学生

好きな食べ物：鳥肉、辛いもの、チキンナゲット

嫌いな食べ物：魚、ホワイトチョコ

特技：早撃ちと洞察力

家族構成：祖母、母、父、妹

ごく普通の家庭で育った。

トラウマ：お湯

高校三年生。かなりのオタク。PS2のバイオハザード4を4人中で一人だけしたことがある。猫耳が萌えらしい。一人でカップレイヤーメンにお湯を入れられない。怒らせたり危機に陥^{おちい}ったり三人が（人為的な）ケガをすると二重人格^{こはく}？が出てくる。you Tubeで「カフェオレ」として妹や琥珀と一緒に活躍中。時々叫びながら実況する。料理が得意。

ト部 うしへ
翡翠 ひすい

15歳 女 1月25日 A型 武器：ナイフ、

剣、ハンドガン（マチルダ）

髪の色：茶色 眼の色：茶色 ツインテール

服

ジャンバー：青の迷彩柄。
ヒートテック：白色。

ズボン：緑のデニム生地。ベルトはなし。
ソックス：くるぶしまでの長さ。黒
スニーカー：赤。

職業：学生

好きな食べ物：イチゴ、あさりの味噌汁、パスタ

嫌いな食べ物：うの花

特技：謎解き

家族構成：母、父、兄

昔から放任

トラウマ：寄生虫

元気な高校一年生。バ○ラの真田○村とヘタ○アが大好きで時々兄と暴走する。ホラーゲームは大の苦手。でも密かにやってみたいと思っている。You Tubeで「シュガー」として兄や桜香と一緒に活躍中。ホラーゲームは絶叫しまくるタイプ。犬好き

ト部^{うらへ}
琥珀^{こはく}

18歳 男 5月7日 B型 武器：ナイフ、ラ
イオットガン、?x2

髪の色：茶 眼の色：茶色 サイドシェイプヘア

服

ジャージ：紺色。

ヒートテック：？

ズボン：青のデニム生地。ベルトは黒。

ソックス：くるぶしまでの長さ。白。

スニーカー：黒。

職業：学生と自作ゲームの管理者

好きな食べ物：チョコ、スコーン、魚、タン塩

嫌いな食べ物：カニ

特技：早撃ちとゲーム。

家族構成：母、父、妹

昔から放任

トラウマ：Gキブリ、クモ

かなり元気な高校三年生。オタク。バ○ラ、けい○ん！、ひぐ○しのなく頃に、などが好き。ゲームも好き。よく拓真とゲームで遊んでいる。you Tubeで「コーヒー」として拓真と一緒に活躍中。カニが苦手なのはクモ（個人的に思っている）に似ているから。主に何があってもあんま動じない。料理は下手。

オリキャラ紹介（後書き）

ヘタリアの夢小説ばっか書いてる気が……

中を確認して入れましょう！

えつと何？これ

なんで車に乗ってんの！？

いやその前に桜香おづかと珀兄はくと拓兄たくと家のリビングにいましたよウチ。

日本某所のある家の中

「いやあああ————————！！！」

「さあ、潔く飛んでけ——マリオー」

画面上からマリオが飛んでいく。そりゃそうだ200%だったしな。
翡翠はガツクリと肩を落とした。

「じゃ約束通りなあー」

「なんでー。バイオハザード4なのさ」

「俺負けたらへソクリがパーになるところだったぜ」

「聞けよバカ」

そう、翡翠が勝てば「デイズニーランド3泊4日の旅」で琥珀が勝てば「バイオハザード4の実況プレイを4人でする」と言う約束をしていた。

しかし、強い。

ハンデとして琥珀は今回やりにくいキャラでプレイし翡翠が一番使い易いマリオを選んだのだ。

しかしながら結果は惨敗。

琥珀は鼻歌を歌いながら部屋から出ていった。

翡翠は無言でwiiの本体からスマブラを取り出し代わりにwii版ヘタリアを入れた。このあとどうなるかも知らずに………

「いらっしゃーい」

「翡翠はどした？」

「潰れてるぜ」

「あ、珀兄おはようです」

「お、バイオハザード恐怖症は治ったのか！」

「はい、やってみるとそんなに怖くなかったんで」

琥珀は拓真の耳に顔を近づけた。

「何したんだ」

「チョットしたせつ！？」

桜香は笑顔で拓真の腹にグーパンチを入れた。

「殺すぞそれ以上言つと」

世にも恐ろしい声音で言つとすぐ元の口調に戻った。

「何でもないんですよ。一緒に頑張ったんですよ、ねー」

必死で拓真は頷いた。

「何か殺されそうだな」

琥珀は何事もなかったようにリビングに入って行く二人を見ながら
呟いた。一瞬背筋が凍るような気がしたのを無視して。

「うー。おうかぁー。ウチ死んじゃう」

「大丈夫、脈あるから」

二人の微妙なやり取りを聞きながら琥珀はゲームケースを見た。

スマブラ出したのか。じゃ、このまま突っ込んでも大丈夫だな

「ビデオカメラ持ってきたか？」

「ちょ、待てセットすつから」

琥珀はバイオハザード4のディスクをwiiの本体に突っ込んだ。

……？入らない？。

「つのゲームのくせにはいんねえ」

「おい、なかに何か入っ」

ギギギッ

ビー——————

ガシャ

ビービー————

「あれ？点かない？」

「ちょい、お前何した」

翡翠が不意に嫌そうな口調でいった。

「中、さ取った、よね」

「は？いやスマブラ出したんだろ」

「ヘタリア入ってたんだけど」

翡翠の顔に笑顔が浮かんだ。目だけは笑っていない。

「いや、ちょおまっつてわざとじゃ」

「知ってるよねー。ウチが、どんなに苦労して買ったのか、ね？」

翡翠が笑顔のまま琥珀の胸ぐらを掴んだ。

「どうしてくれんだ？あ？テメエ弁償出来んのか」

「待て早ま」

「テレビに顔でも突っ込んどけやあっーーーーー!!」

怒声を上げ自分の兄をテレビ画面に向けて投げつけたあとで気づいた。

「あ、ごめっ」

「あ」

「あ」

ガラスの割る音はしなかった。恐る恐る目を開けると体の下半身をテレビに突っ込んだ琥珀がいた。

「どうなって」

テレビのすぐ後ろは壁。せいぜい15?幅があるかどうか。

「おい、体が引っ張られんだけど。後ろに」

「え、待って今引っぱる、から!」

「っ動かないよ」

「もっと足に力込めて引っ張れ!」

3人で力一杯引っ張る。だが前に進まずどんどんテレビに体が入っていく。

「なにこれっ」

「俺らも吸い込まれっ」

一瞬目の前が光り、4人は意識を手放した。

中を確認して入れましょう！（後書き）

駄文

もしもの世界だそうです

「あ、起きた」

「フェ、フェリシアーノ？」

窓の外を見ていたフェリは天使のような笑みを浮かべた。

二次元のフェリを現実にしたみたいな顔だ

ガタン、と車が揺れ隣の桜香が目をこすった。後ろの琥珀と拓真も伸びをした。

「ふあ、よくね、？」

フェリを見たたん拓真は固まった。桜香は何故か運転手に「ラジ
オつけてください」と頼んだ。

「桜香、これっ「静かに」」

「えー今日のニュースです。ユーロのね……」

英語だ。それも理解できる。

「みんな起きたみたいだね。記憶は、無い？」

「えーフェリシアーノ・ヴァルガスさん、としか」

拓真が混乱したような口調で言った。それを聞いてうちらも頷く。

「えーとね、Bさんの迷子の娘さんの搜索でBさんから4人をお願いがあつたんだ」

「迷子、Bさんってだ「これを見たら分かるから」

2枚の紙と写真。

それには信じられないことが書いてあつた。

機密事項

石月 桜香

国籍：？

特殊訓練校を7歳で卒業。9歳の時ラクーンシティの事件に関わり活躍。？。13歳でフェリシアーノ、ルートヴィッヒ、後3人と共に任務で南米に向かう。ミドルネームはリア。

石月 拓真

国籍：？

特殊訓練校を7歳で卒業。12歳の時ラクーンシティの事件に関わり活躍。？。16歳でフェリシアーノ、ルードヴィッヒ、後3人と

共に任務で南米に向かう。ミドルネームはレイス。

ト部 翡翠

国籍：アメリカ

特殊訓練校を7歳で卒業。9歳の時ラークンシティの事件に関わり活躍。？。13歳でフェリシアーノ、ルードヴィッヒ、後3人と共に任務で南米に向かう。ミドルネームはラム。

ト部 琥珀

国籍：アメリカ

特殊訓練校を7歳で卒業。12歳の時ラークンシティの事件に関わり活躍。？。16歳でフェリシアーノ、ルードヴィッヒ、後3人と共に任務で南米に向かう。ミドルネームはシン。

ツェリ捜査のメモ

ツェリ・ツヴィンクリ(20)

我が輩の娘。

数日前マサチューセッツ州の大学から帰宅途中に、

謎の集団によって連れ去られた。

ツエリを拉致した集団の目的は現時点では不明。

最大の問題は、この犯行に内部の者が関与した可能性があるという点。事件が機密扱いで、捜査も少人数なのは、裏切り者が今も特定できないことが影響している。

情報部がつかんだヨーロッパの田舎で見た目撃情報も畏の可能性も高い。

娘を助けてくれ。

ユ・ツヴィンクリ

バツシ

「あ、……ちょっとみんないいか」

かなり意識して言うと日本語が言えた。さすが俺。

「っと、特殊訓練校ってウチら行ってないよね」

「うん。しかも翡翠の家のいたはずですよ」

「もしかして、さwiiの本体に俺が押し込んだことも原因？」

「かもな。それが原因でi fの世界に、飛ばされた、と」

「この世界の俺らは？」

「ウチらのいた世界にとばされたのかも」

「それはないです」

翡翠が首をかしげた。

「仮説としては2つ、1、これは何でもなかった夢。2、何らかの原因でi fの世界に飛ばされた。ですが夢はありえません」

「どうして？」

「記憶があるんですよ。知らない顔、知らない場所」

「何で分かったの？」

「説明するのはちょっと難しいですよ、……………自分の中に集中してください」

体から力を抜いて、奥に、奥に、奥に……

「」「……………」

何かが頭の中を濁流のように流れ出す。

知らない顔、知らない場所、そして…………。

「っ！」

「何か途中で無理やり切ったようなところが…………」

「ああ、あつた。でもちよつとばかり分かつた」

「何？」

「もしも、俺の父がアメリカ人だったら、もしも、現実にアンブレラ社があつたら、もしも、ヘタリアのキャラが国として存在しなくてもバイオハザードの主なキャラの代わりにいたらってやつ」

「あ、俺も、もしが分かつた。翡翠が生まれたときハワイにいたからアメリカ国籍にするかつてのだ」

「えっと、桜香と拓兄のお父さんがアメリカ人だったら、現実にアンブレラ社があつてヘタリアのキャラが国じゃなくてもバイオハザードキャラとして居たらで、ウチが生まれたときアメリカ国籍にしてこっちに住むかって話、の世界？」

え？撃っちゃったの

「無理だろ。でも俺の母さん、アメリカ人の恋人が居たって言うってたな」

「×1です。特殊部隊に所属していて結婚するか別れるかでそうとう悩んだって言うてました」

「で、どうすんの、カメラ点けっぱだよ」

「あ、忘れてたぜ」

「とりあえずはこのまま進むしかないな。丁度こっちの俺も強ーみたいだし」

「終わった？」

あ、フェリ忘れてた。

普通は話に混ざってくるんだけどね。

「ええ」

運転手が話しかけてきた。

「おい、お前ら何もんなんだ？あー？アメリカからわざわざご苦労なこつたな？」

「ごあいさつだね。用件は聞いてるでしょ、迷子の娘さんの搜索」

フェリが強気だ。

「子供3人と男一人でか」

あ、メガネいじるなよ。番組変わったじゃん。

「みんなでパーティもないからね、こんな山奥で。君たちならしかねないけど……………」

黒フェリ、が降臨…………だと。

「変な奴だぜ。ま、所長の命令ならしょうがねえけどよ。ちよろい仕事じゃなさそうだな」

「頼りにしてるよ」

フェリは素っ気なくそう言い、窓に視線を戻した。

窓の外は何も変わったことはない。せいぜい木枯らしが吹くくらいだ。

車の中でやかましい音楽が響く。

ウトウトしていたのだろうか、何かで目が覚めた。

暖かいはずの車内。腕を見ると鳥肌が立っていた。

「何、これ」

桜香は窓ガラスの外を食い入るように見つめている。

「何かいた」

「桜香、口調が」

「うん」

「待たせたな」

青ひげが乗り込んできた。

「いや、そんなに待ってませんです」

拓兄と珀兄は後ろで話し込んでる。かなり小声だ。

しばらく進むと村が見えてきた。

「田舎だ。懐かしい」

「何処がだよ」

「こつから先が例の村だ」

フェリが先に降り、続いてウチ、桜香、琥珀、拓真が降りた。メガネと青ひげは降りない。

「駐禁とられたくねえし俺らは車を見張っておくぜ」

「まあ、そうだね」

「頼んだぜ」

「なけるね」

フェリが小声で呟く。

「何か言ったか」

無視して村の中に入ろうとした。

「いいのか？あいつら」

「いいよ、行きたくないんならそれで」

拓真は溜息をつき、村の入口に入った。

「ボロ、塞がれてるよ」

道は車で塞がれてる。あの民家は

「おっじゃましーす」

「元気いいねえ。おつ邪魔しまあーす」

「うるせえんだよ、お前ら」

元気の有り余るト部兄妹を見ながらフェリは少し苦笑した。

「えっとすみません」

暖炉のそばの男に声をかけるが聞こえていない。

「いい年して火遊びに夢中かよ」

琥珀が呟き、拓真が男に近づいた。

「すまんが、こんな娘さん知らない？」

男が何を言ったか不明だが拓真は

「あ、邪魔ようだからで行くよ」

「理解できたのか?!」

「いや、さっぱり」

そう言っただけで全員は踵を返そうとしたが反射的に飛び退いた。

斧を持った先程の男。

フェリが銃を構え、撃つ。もちろん威嚇射撃だ。

「止まれ！」

男は止まらない。フェリに近づいていく。

パン、と乾いた音が響き男が倒れた。

撃つたのは全員。

え？撃っちゃったの（後書き）

なんだこりゃ

パースタアーーーーー！

「一般市民、だよな」

「待つて車の音がするんだけど」

ブooooooooooooooooooooッ

さっきのオンボロ車がメガネと青ひげ（警官）の乗った車の方へ突撃していく。

「おい、あれ！」

『なんだあいつら？早く降りろ！ヤバイ！来たー！』

叫び声が聞こえ、それなりに重さがあるものが水に落下する音が聞こえた。

「……アントーニョ」

フェリが無線を手に持ち呼びかけた。

『ザザー、フェリ？無事なん？』

「うん、無事だよアントーニョ」

『良かったわあ。連絡ないから心配してたんやけど』

「アントーニョ？」

『翡翠、桜香、拓真、琥珀も無事なん？』

「無事だよー。でも俺ら村人に襲われてさ、この村で間違いないみたいだよ。外も2、3人いるみたいで囲まれてる」

『包囲を突破して、村の中央に向かってえな。発泡も許可されとるらしいから』

「分かった」

言わずとも体が反応し、扉の脇に立つ。

3、2、1

扉を勢いよく開き外へ飛び出す。

「村人っ？」

発泡は許可されているが、相手は村人。

「躊躇うな。ためらったらその時点で殺^やられる」

体は以外にも震えないし落ち着いている。慣れているのかもしれない。

「久しぶりの修羅場だね」

思わず口から言葉が零れる。

「久しぶりの任務？」

「うん。そうだ、ね」

さすがに初めてとは言えない。だってウチ違う世界の人、なんて言えないし。

桜香はナイフを巧みに操り銃を使わずに村人を一人倒していた。

銃弾の節約に気づいたのかあとの3人もナイフに持ち替え村人を倒す。

「悪いな」

拓真が男の首をナイフで一息に切りながら言葉を口にした。

拓真と琥珀の顔に血が飛び散りかなり悲惨だったが、ハンカチで普通に何事もなかったのかの様に拭いていた。

翡翠や桜香は少し工夫して血が飛ばないようにしていたので顔や服にもついていない。

作：ゲームとは事情が違うでな

「行くか」

「そうだね。早く帰ってパスタ食べたいし」

やっぱりパスタ好きなんだ

舗装されていない道をゆっくり歩く。

白いものが目の端にうつった。

「くうん」

真っ白な毛皮の犬？

トラバサミに足を挟まれている。

「なんてことを、すぐに外すからね」

左足は痛々しいほど出血し、翡翠が外すと片足をかばいながら森に飛び込んでいった。

「大丈夫かな。あのワンちゃん」

心配そうに犬が飛び込んでいった方を向いて歩いていた翡翠はフェリの背中に激突した。

「うぶっ!?!」

「あ、ごめんね」

「いや、よそ見していたウチも悪いし」

「止まれ」

「何だ」

「あれ、見えるか」

拓真が指さすのは二つの木に繋がった紐。紐の端にはくぐられているのは手榴弾のピン。

「そしてその先にはむーらーびいいとおー」

「桜香、何歌ってんだ」

「黙れ、愚兄」

何故か黒くなってしまった。

桜香、お兄ちゃんは哀しいよ。お前がどんどん遠くに行くみたいで

またもや理解不明な言語を叫ぶ村人。

「あ、おーいこつちだあああああ」

「村人呼ばないでよ！このばかつ！愚兄！」

「あーそう言うことなんだ。俺も分かったよ。みんな下がって」

訳が分からず下がると村人が走ってきた。

「ああ~~~~~そつかあ」

わざと当たらすんだ。

琥珀の目論みどおり木の間にいった瞬間、せん光が走り、村人は木

つ端微塵に吹き飛んだ。

「いいのか、これで」

「; p a w w w w ああああ！」

「何！？」

「まだ居たのか」

目にもとまらぬ早業（正確に）でフェリと琥珀は鉛玉を打ち込むが村人は悪運が強いのか無傷で逃げていった。

「逃げ足早いよ」

フェリは眉を寄せ銃を下ろした。

「フェリ、そんなに落ち込むな。パスタあるぜ？」

「あ、本当？俺腹減ってたんだー」

いつものフェリだ。うん。

拓真は皿にのったパスタをどこからともなく召喚し、手渡した。

「そんなもん、この日本にあつたのかね」

「ねえよ。ここ日本じゃねえし」

うん、ヨーロッパのかなあああり田舎。

「進むよ？」

器用にパスタを食べながらフェリが聞いた。

ちなみに進んでいる順はフェリ、翡翠、琥珀、桜香、拓真だ。拓真が最後なのは後ろから来た敵の頭を97%ぶち抜けるという実績から。

「おー、村人？」

「待って何か変だ。望遠鏡で……」

「フェリ？ちょっと貸してください」

桜香が固まったフェリから望遠鏡をひったくるとすぐさまのぞき込んだ。

「普通に動いてる村人ですね。でも何か燃やして……っ！」

「どうした？」

「……さっきの警官さんが木に胸から突き刺さって……ます」

翡翠の目が大きく見開かれた。

「う、そ」

翡翠はいつもならば大粒の涙が頬を伝っているが今回は涙を流すと言う事はなかった。

感情の起伏が激しい自分と違い、こっちの翡翠は意外と感情の波があまりないようだ。

「……でも感傷に浸ってる場合じゃないよ。俺は二手に分かれた方がいいと思うんだけど」

「そうだな。じゃあ、フェリ、翡翠、琥珀が下から行ってもらえるか？。俺はコイツと2階に行くから」

「「「「yes」」」」

フェリチーム

「数少なっ！」

「そのほうがいいだろっ」

民家の屋根から死体が落ちてくるのを捌ける&再装弾リロードしながら琥珀が翡翠に向かって叫んだ。

「あ、弾切れたよ」

「村人の拾えよ！」

フェリは少しばかり躊躇し弾を拾いに戻った。

「俺のこと見捨てないでね」

「大丈夫だよ。フェリのことが見捨てないからっ！」

どこかで翡翠の母性本能が動いたらしい。

「っとおいでなすったな。チェーンソー男」

琥珀から3メートル先に5人の村人がいる。

「オメエらなんか、ナイフで十分だ」

拓真チーム

「カタリヤないですかね、中国の暗殺系の投げ環でもいいんですが」
ナイフを首にぶち込みながら恐ろしいことを桜香はぼやいた。

「いいか、弾は節約しろよ」

「っさいんですよ。マグナム使わせろってんだろ！」

桜花が3人の首を一気に裂きながら苛立たしげに言った。

口調が変わるのはきつと血のせい。

パースタアーーーー！（後書き）

ねむ、
い

ころーがありいまあーす

「いや、節約しろよっ!」

「節約、節約ってこんなにいたらナイフだけじゃその内死ぬよっ!」

いや、そのための節約だろ

「でも、何で襲うの? Tウイルスに感染したわけでもないんですよ」

頭の何処かで「人食い病」と言うキーワードが引つかかるがそんな事を気にして時間をとる訳にもいかない。

「ちっ、いくらなんでも多いな。……そろそろ終わりのはずだが」

「鐘の音?」

ゴォーーーーーン、ゴォーーーーーン

残った村人はボソボソと何事かつぶやき家の中へ入っていった。

「よつと」

「……………」

屋根の上から飛び降りると琥珀がこっちに走ってきた。

「同じか?」

「そうらしいな」

「フェリは？」

「弾の補充しに行っただぜ」

「ただいまー。村人帰ってただけど」

「ああ、鐘の音も関係あんのかもな」

「翡翠はどこ？」

フェリが心配そうに見回したとき、炎の前で佇む翡翠がいた。

両手を合せて祈っていた。

「ゲームとは、違うからね。やっぱ」

誰にも聞こえないような小声で呟き、踵を返した。

「ま、訳はわからんが進むか」

「そうだね。弾も補充したし、ね」

桜香の周りだけ空気が一瞬凍りついた。

「ヴェ」

「どうしたの？」

「悪趣味だよ。これ」

フェリが指差したのは頭ガイコツが2つぶら下がった赤い木の看板。
何も書かれてはいないが……嫌な感じがする。

何故か上を見上げる拓真。

「げっ」

「おーい拓真ー早く来いよー」

「ばっ、早くもどっ」

しばらく谷のように細い道を進んでいた時、少し先を歩いていたフエリ、琥珀の手を掴んで引き戻したがもう、遅い。

巨大な岩が空中から落とされ、慌てて皆走り出した。

「いやあああーーーーー!!!!!!」

「白旗、白旗どこっ」

「?————」

「琥珀っ、歌うんじゃね————!!」

「ノープロブレム!!」

トラバサミ

「ぜえ、ぜえし、死ぬかと思った」

「お、おれも」

「嘘、つ…け。パスタのんきに食いながら走る奴があるか」

「てかあぶねーな。死んだらどうする気だよ」

「殺すのが目的なんですから……」

何とか大岩をよけ、息も絶え絶えな声で5人が口を開く。

「ぶっ殺してやるあぁっ！あの村人っ」

何故か琥珀が先程の事を学習せず走り出そうとしたので拓真が服の襟をつかんだ。

「馬鹿っ、この先は……あいつが居るかもしれねえだろ。猿でも学習するぞ。ちゃんと考えて動け」

「けど、ひ、……………分かった」

「でも、何なのかなあ」

「何が？」

「うん、あの最初にあった人、さ「アーサー様」って言ってたんだ

けど」

アーサー、「お前のためじゃなくておれのためな」……

ぐいつと後ろに引つ張られた。

「トラバサミ？」

あの犬が挟まっていたのと同じものだ。何？トラップ好きなの？

拓真は一つ溜息をつき、銃で一つずつ撃った。

カランと音がしお役御免になったトラバサミをぽいぽいと絶対歩かなそうなところに投げ飛ばす。

『フェリ？聞こえるん？』

「あ、アントーニョ。あそこも村人に襲われたんだよ。後、同行した警察官の人も」

『……そこも危険やんなあ。……北側のルートで村から抜けられるんよ』

「分かった。向かうよ」

ザーザーと言う音が消え、フェリが無線をしまった。

「何だ？廃村かここ」

「それは知らないけど、先に進んだほうがいいよ。また襲われると

嫌だからねー」

ボツロボロの屋敷のドアを開けながらフェリが微笑んだ。

ドンドンドンッ！

「っ、な、何まさかのぞぞゾンビ！ゾンビでしょ！ゾンビなんですよー！！」

「落ち着け。錯乱するなよ。大丈夫だ」

「ヴェー、でも油断はできないよ。……」

クローゼットから音が聞こえる。

「開けますよ……………てっ」

なかから転がり出てきたのは……………フランススっ！！？

トラバサミ（後書き）

関西弁が分からない

注射器

「んーーーーんーーーーー！」

フ、フランスス！

「おいっ、てか、次は……」

ベリ、とフランススの口から少し手荒にガムテープを外すと「ゆっくり外してくれない？」と言われた。

それを無視してフェリはうつぶせに転がし、戒めを解いた。

「何？お嬢さん達はあいつ等と違うのっ！」

「あ、ごめん。脇はいった」

フェリはあまり心のこもらない謝罪をし、フランススはため息を一つつき、聞いた。

「ひとつ大事なことを聞くよ」

少しばかり拓真以外身構えた。

「タバコある？」

真面目な話かと思って身構えた翡翠は肩を落とした。

フェリがどこか上の方に視線を向け呆れたように言った。

「ガムなら」

「ガム持ってたんだ」

フランススは頭上に目を向けながら手首をさすった。

その時、唸り声が、聞こえた。

「む、村人!？」

村人が二人「ヤバッ」とフランススが叫ぶとどすどすとかかなり重いものが歩く音が聞こえた。

あの、人だよね。2メートル背あるけどただの人だよねー。

「先手必勝!!」

とばかりにフェリと琥珀が地面を蹴り上げ桜花と翡翠も脚力にものをいわせナイフを掴んだまま二人の村人を切りつけた。が、ぐるりと視界が反転した。

「あ、足首もたれたっ、チョッ離…」

「ヴェーーーーーーー!!」

大男は二人の足を掴み先ほどフランススが入っていたダンスに投げつけ凄まじい音を立ててダンス自体が壊滅した。

もうもうと煙がたちこめぐったりとした二人。

「フェリっ！」

翡翠が慌ててフェリの方に目を向けた。フランスも巻き込んでるっ！

一瞬の油断が間違いだった。

「翡翠っ！」

桜花の声に振り向いたときには遅かった。

頬にものすごい衝撃が走り、体が埃の溜った床に投げ出される。

ごとと頭にも衝撃が走りぐらりと視界が揺れ桜花と拓真が何事か叫んだが聞こえない。

ぶつり、とテレビ画面が消えるように意識が途切れた。

『弱き人間よ……俺たちの力をさずけてやるっ』

薄暗い闇の中から手が伸びる。

その手には注射器が握られ、首に針が刺さり、フェリは僅かに顔を上げるがすぐに首が垂れた。

その様子を見た男の口角があがり含み笑いがこだまする。

「お前もやがてこの力の魅力に逆らえなくなる……」

その注射器のシリンダーからスルリと卵が首から入り込んだ。

縛られ中

埃っぽい床、すきま風が吹き込むあばら家。

「お兄さんのこと助けに来たんじゃないの？」

「ぜんっぜん違うね。性別ごと違うから」

縄で括られた手をどうにか抜けようと必死で動かしながらきっぱり言った。

「あーどうすんだよ、フェリも翡翠も桜香も起きねえし、踏んだり蹴ったりだしさー」

どうやって括ったのかは知らないが縦に長い円になるように縛られている。円の真ん中だけ空いているが。

「ん、……………あれ？ここは……………」

「起きたか、どうだ？頭打ったみたいだが気分悪くないか？」

フェリの顔を見るが、少し青ざめているだけで見ただけなら問題はなさそうにも見えるが、のうしんとつ脳震盪や頭蓋骨にひびが入っていないとも限らない。

「いや、どこも変わったところわないけど、琥珀は？」

「全然問題ない。後は二人だけなんだよなあ」

「恋人？」

「全く違う、俺の妹とこいつの妹。どこからどう見ても兄妹だろ」

フランスに冷めた瞳を向ける琥珀。案外怒っているのかもしれない。

「でもさ、子供4人と大人1人がスペインのこおおんな山奥のド田舎に普通来ないだろ？」

まあ、見るものと言えば狂った村人や腐った食べ物、運がなければあの世逝きもありえる。しばらくここに居れば確実にそうなるだろう。

「この村、どうなってる？」

「さあ、お兄さんは案外詳しくないんだよね」

はぐらかすような物言い。何か隠してる？

「そうだ、おいこの……写真に写ってる女の子、知らねえか。俺らはその子を探しにここまで来たんだよ」

苦心してポケットから写真を抜き取り男に見せた。

「拓真……だったかな、黄人種だから若く見えるだけかもしれないんだけど警察官にしては泥臭くないし」

「……俺が誰だろうと関係ない」

男の片眉が上がる。顔は爽やかな笑を保っているが明らかに爽やかすぎて噓っぽい。

「その女の子、大統領の娘だよね」

僅かに空気が震えた。動揺が背中越しに伝わる。

「へえー、なんで知ってるのかな？ 訳を言ってもらえる？」

フェリの顔色がだいぶ元に戻ってきた。もしこの男が敵だとしても縛られている今、何もできない。鼻を不機嫌にならしてフェリが聞く、

「超能力」

あっさり男はそう言った。フェリ、やめろ、マジにすんな。

「嘘に決まってるよ、アミーゴ。本当は奴らが大統領の娘を教会でどうとかって、お兄さんが又聞きしたんだよ」

ガラガラと何か大きく硬質な物を誰かが引きずっている。誰が？――
――答、みんなが撃った最初の村人。身長をゆうに超える斧を顔も服も赤い血で染め上げた村人がひこずりながら廃墟と化した小屋（フェリ達が監禁された）に向かって歩いてくるのを誰かが意識だけで見ていた。

「そう言うお前は？」

「フランス・ボヌフォア、ただのハンサムなお兄さんだよ」

フランスはマドリッドの警察官だったらしい。

なんで辞めたのか聞くと「憎まれ役に飽きてね、結局お兄さんは正義の味方は似合わなかったんだ」と言われた。

「俺も元警察官なんだー。一日だけだけどねー」

「お兄さんより根性がないね」

「仕方ねえだろ。フェリは初日からあのラクーンシティに見事大当りしたからな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284x/>

バイオハザード4 + ヘタリア + 俺たち

2011年11月26日17時50分発行